ＪＲ東海労ニュース

№２３３３
２０１８年１０月３日
ＪＲ東海労働組合

ICLS（国際労働者交流センター）モンゴルフォーラム
新幹線車内での事象を問題提起！

ＩＣＬＳ（国際労働者交流センター）フォーラムが９月27～28日、モンゴルで開催されました。ＪＲ東海労からは木下委員長が参加し、新幹線車掌の乗組み数削減に関して報告・問題提起を行いました。以下、その要旨です。

東海道新幹線の車掌は、１列車で３名乗務していましたが、2018年３月から１列車２名の体制になりました。2016年６月、新幹線車内での焼身自殺（乗客２名が死亡）、2018年６月、殺傷事件（乗客１名死亡、乗客２名負傷）がありました。会社は事件の対策として、防犯カメラ設置と増設、車掌による不審者・不審物に対するこれまで以上の確認強化、車掌用の耐刃ベスト、耐刃手袋、防護盾、刺股（さすまた）を列車内に搭載することになりました。

ＪＲ東海労は、新幹線列車内で殺傷事件を起こさせない対策を会社に求めています。しかし会社は「空港のように乗客の手荷物検査はできない。利便性を損なうからだ」と言います。安全より利便性優先なのです。テロ対策としても、乗客を巻き込む事件を未然に防ぐ対策が必要です。

人には人がサービスを行うのが基本だと考えます。様々な技術が進んだといえども、人によるサービスをすべて機械にあるいはシステムに代替させることはまだまだできないと考えます。東海道新幹線の車掌の体制を元の３名乗務に戻せば、全て解決するわけではありませんが、「運輸産業の自動化」に関連して、東海道新幹線で発生した事象を提起しました。